

平成 29 年度
入 学 試 験 問 題

第 1 回

国 語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしや}の指示があるまで開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 特に指定のない場合、記述で答える問題は、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}を一字として数えるものとします。
- 5 問題は 1 ページから 14 ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	------------	--

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「むかしむかしあるところに、お爺さんとお婆さんが住んでいました。」

これは、昔話の冒頭に、しばしば描かれる始まりの場面ですね。私たちがよく知っている昔話、たとえば、「桃太郎」も「一寸法師」も、「かぐや姫」も「花咲爺」も、例を挙げれば、きりがありませんが、ほとんどがお爺さんとお婆さんが物語の最初に出てきます。子どもの頃に、昔話の世界は、どうしていつもお爺さんとお婆さんだけが暮らしているのだろう、と不思議に思った人は多いと思います。

昔話の多くが、お爺さんとお婆さんの二人暮らしを描いている理由として、昔話が語り出された背景に、現代社会と同様に、かつて高齢者が増えた時代があつて、実際に、お爺さんとお婆さんの二人暮らしが多かつた時代があつたのではないかと考えられる人もいます。そうかもしれませんが、本当のところはわからないというのが正直なところです。しかし、後で説明するように、何らかの社会的な影響が昔話に反映していると考えられることはできません。

では、次のような、物語の始まりを考えてみたら、どうでしょう？

「むかしむかしあるところに、お爺さんとお婆さんがたくさんの子や孫に囲まれて、たいへんにぎやかに楽しく暮らしていました。」

いかがですか？^② こんな昔話の始まりは、聞いたことがないかと思ひます。始まりというより、むしろこれは物語の結末の場面といつてよいと思ひます。

先に挙げた例が示す通り、昔話は、満ち足りた「充足」状態が結末になり、逆に、何か足りない「欠如」状態が物語の始まりに来るようになっていきます。ですので、昔話に描かれた「欠如」状態を見れば、どういう状態が「I」と考えられていたのか、また「充足」状態を見れば、どういう状態が「II」と考えられていたのかが、よくわかるのです。

しかし、必ずしも、すべての昔話が、「充足」状態で終わるわけではありません。主人公が約束を守らなかつたり、驕り高ぶつたりした結果、元の「欠如」状態に戻つて終わるといふ結末も多いのです。「欠如」から始まつて、「充足」状態で終わるタイプの話を、「上昇型」の構造として捉えることができるかとすれば、元の「欠如」状態に戻つて終わるタイプの話は、「循環型」の構造として捉えることができると思ひます。昔話の構造を思い切り単純化してみれば、このように捉えることができるかと思ひます。

ところで、ここで一つ注意しておきたいことがあります。それは、お爺さんとお婆さんだけの二人暮らしの状態が、本質的に、何か欠けた不十分な状態であると言いたいわけではないということです。お爺さんとお婆さんの二人だけの暮らしでも、とても幸せで充実した生活を送っている場合も多いと思ひます。むしろ、お爺さんとお婆さんの二人暮らしは、よく見られる当たり前の状態であつて、そこに何か不足を見たり、逆に、幸福を読み取つたりすること自体、思いつかないぐらい、ごくふつうのことであるかもしれません。

お爺さんとお婆さんの二人暮らしが、実際はどうなのかという問題とは別に、ここで重要なのは、昔話の世界においては、お爺さん

とお婆さんだけの二人暮らしは、何か物足りない状態だと考えられているらしい、ということなんです。

すでに述べたようにこのような昔話が語られ出した背景に、現代社会と同様に、高齢者が増加したという社会状況があつたかどうかはわかりません。しかし、高齢者だけの暮らしに対して、これを良しとはしない考え方が、社会的に共有されていたと考えることは可能でしょう。

いずれにしても、お爺さんとお婆さんが登場すると、聞き手は、このままでは良くない、きっと何か変化が起きるはずだ、そういうふう

では、何が物足りないと考えられているのでしょうか？ それは、子どもです。子どものいないお爺さんとお婆さんのもとに、子どもがやってくるようになります。

昔話のなかに登場するお爺さんとお婆さんには、たいてい子どもがいません。子どものいない老夫婦に、あるとき降つてわいたように子どもが与えられます。「桃太郎」の場合には、川に洗濯に行つたお婆さんが、川上から流れてきた桃を拾つて帰ると、桃の中から桃太郎が生まれます。別のタイプの話では、桃を食べた老夫婦が若返つて、子どもが生まれたというものもあるようです。いずれにしても、これはまったく奇跡というほかないでしょう。このような不思議な誕生によつて登場する主人公は、しばしば「神の申し子」と呼ばれています。言いかえれば、神から与えられた「贈り物」ということです。

柳田國男は、昔話のなかで幸運をつかむ人物像として、二つのタイプを指摘しています。一つは、「生まれつき備わつた福分をもつ者」で、もう一つは「心がけがよくて神に愛せられている者」です（柳田國男「桃太郎の誕生」『柳田國男全集10』ちくま文庫）。

一つ目の「生まれつき備わつた福分をもつ者」とは、不思議な誕生をする主人公がそうです。その誕生の仕方からもわかるように、特別な人物です。ですので、こうした人物が類まれな英雄的な活躍をすることも、大いに理解できるといえます。「神の申し子」と呼ばれる所（*）以（*）です。

一方、「心がけがよくて神に愛せられている者」というのは、たいへんわかりやすいかと思ひます。ある意味、「心がけ」は本人次第で誰（*）もがやろうと思へばできることですので、誰もがお手本にできる人物像ということができます。「笠地藏」や「花咲翁」のお爺さんように、親切で心やさしい人物が思ひ浮かびます。

桃から生まれた桃太郎は、この二つのタイプでいえば、「生まれつき備わつた福分をもつ者」に相当するといえます。生まれつき幸せになることが運命づけられている人物ということになります。

しかし、「生まれつき備わつた福分」という説明は、「幸せになることになっているから、幸せになる」と言っているようなものです。そうとしかいようがないのかもしれませんが、（*）それでは説明になっているとはいえないでしょう。不思議な誕生をする主人公には、生まれつき備わつた福分だけでなく、（*）それとは別にもう一つ、幸せになるべき理由があるように思ひます。

桃から桃太郎が誕生したことは、老夫婦にとつては、まったく奇跡的な出来事です。しかし、だからといって、まったく思いがけない出来事とはいえないようなのです。というのは、老夫婦は長い間ずつと、子どもを授かることを祈っていたのではないかと思われるからです。主人公が不思議な誕生をする昔話として、「田螺長者」と呼ばれる話があります。この話の場合は、子どものいない老夫婦が観音様に祈ると、老婆に子どもが生まれるのですが、それが人間ではなく田螺であったという話です。それでも観音様から授かった子だということで、老夫婦は田螺を息子としてとても大切に育てることにします。田螺はその才覚で長者の娘と結婚し、本来の人間の姿に戻って、ハッピーエンドで終わります。「桃太郎」の場合は、老夫婦が子どもを授かるように神仏に祈る場面はないようですが、おそらく、ずっと子どもが授かることを望んでいたことは間違いないでしょう。それは、子どもを手に入れた老夫婦が心から喜んで大切に育てていることからわかります。

これらの話からわかることは、不思議な誕生をして生まれてきた主人公は、心から望まれて生まれてきているということです。そして、もう一つ重要な点は、生まれてきた子どもたちは、老夫婦に受け入れられることをまるで当然のこゝのように、自然に老夫婦の懐に入っていくことです。親は子どもを望み、子どもも親のもとにやってくることを望んでいるのです。望み望まれる関係にあるということがいええます。

⑥ ここから、なぜ昔話の世界では、子どものいない老夫婦が、しばしば登場するのか、その理由がわかってきます。物語のなかで、子どもが登場するためには、子どもが「欠如」している状態を描く必要があるからです。これによって、子どもの誕生は「欠如の解消」すなわち「充足」を意味することになります。また、なぜ老夫婦なのかもわかってきます。なぜなら、子どもを授かることを、長く待ち望んでいたことを示すことができるからなのです。これは言い換えれば、「可能性の欠如」ということができるかと思えます。若い夫婦であれば、子どものいない状態は、欠如かもしれませんが、子どもを授かる可能性においては、欠如とはいえません。その意味では、充分な意味での欠如とはいえないからです。しかし、老夫婦の場合は、可能性においても、限りなく欠如の状態にあることが示されているのです。現状において欠如であるばかりでなく、可能性においても欠如の状態にあつてはじめて、子どもを授かることが「奇跡」として捉えられることになるのです。まさしく、神からの贈り物というわけです。

(山泰幸『だれが幸運をつかむのか』より)

(注) * 福分……もつて生まれた幸運。

* 所以……わけ。理由。

問一 ——— ①「何らかの社会的な影響が昔話に反映している」とありますが、筆者は「何らかの社会的な影響」をどのようなことだと

述べていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 現代社会と同様に、かつて高齢者が増えた時代があつて、高齢者だけの暮らしが当たり前のように見られていたこと。

イ 高齢者だけの暮らしを好ましくしないと考える方が、かつての社会の中で広く共有されていたこと。

ウ 現代社会とは異なり、高齢者だけの暮らしでも周囲の人びとが支えあうような環境が整っていたということ。

エ 高齢化社会がかかえる問題は、現代と同様に、かつての人びとの間でも深刻なものと考えられていたこと。

問二 ——— ②「こんな昔話の始まりは、聞いたことがないかと思ひます」とありますが、筆者はこのような昔話の始まりを示すことに

よつて、どのようなことを述べようとしているのですか。その説明として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 物語の冒頭には、何かが足りない状態が描かれるのが普通であること。

イ すべてが満ち足りた状態を冒頭に描いたのでは、物語が始まらないということ。

ウ 冒頭にお爺さんとお婆さんの二人暮らしを描かないと、物語が終わってしまうこと。

エ 昔話には、多くの物語に共通する基本的な構造が存在するということ。

問三 本文中の

I

 ———

II

 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 現実 ——— 理想

イ 理想 ——— 現実

ウ 幸福 ——— 不幸

エ 不幸 ——— 幸福

問四

~~~~~ a 「『上昇型』の構造」、~~~~~ b 「『循環型』の構造」とありますが、次に挙げる会話は、五人の小学生が、これら二つの型について意見や感想を述べたものです。この五人の中で、~~~~~ b 「『循環型』の構造」をもつ昔話について、最も的確なことを述べているのは誰ですか。AくんからEさんまでの五人の中から一人を選び、記号で答えなさい。

Aくん 「ぼくは、こっちのタイプのお話のほうが好きだなあ。だって、夢があるよ。『シンデレラ』は日本のお話じゃないけど、シンデレラ・ストーリーって言葉があるように、外国でも同じような構造を持つお話があるってことかもしれないね。」

Bさん 「たしかに、もう一つのタイプのお話のほうは、夢がないわよね。結局元に戻ってしまふのでは、はかない夢っていうか、むなしじゃない。だったら最初から夢なんか見ない方がいいものね。」

Cくん 「でも、どんなお話でも、時代を超えて語り継がれてきたのには、それなりの理由があると思うんだ。たとえば子どもが道徳を学ぶのに、むずかしい説教を聞くよりもわかりやすく効果的ってことも考えられるよね。」

Dさん 「そうね、どちらのタイプのお話にせよ、昔話を調べていくことで、それを語り継いできた人たちの思いや考えにふれることができるかもしれないわ。今度、子どもの頃に読んだお話を、改めて読み返してみようかしら。」

Eさん 「それよりもわたしは、昔話に基本的な構造があるってことに驚いたわ。物語の構造を学び理解することは、昔話ばかりじゃなく現代の小説を読み解くうえでも有意義だと思うの。中学生になったら、ぜひそんな勉強を試してみたいわ。」

## 問五

—— ③「それでは説明になっているとはいえない」とありますが、「それ」が「説明になっているとはいえない」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 理由や原因を明らかにしていないから。  
 B 理由や原因が逆になっているから。

ウ 問いかけがそのまま答えになっているから。  
 エ 同じことを別の表現で言い換えたにすぎないから。

## 問六

—— ④「それとは別にもう一つ、幸せになるべき理由がある」とありますが、「もう一つ」の理由とはどのようなことですか。その答えとなる次の文の（ ）に入る言葉を本文中から十字以上十五字以内でぬき出しなさい。

主人公と老夫婦は（

）から。

## 問七

——⑤「老夫婦は長い間ずっと、子どもを授かることを祈っていたのではないかと思われる」とありますが、このように推測できる根拠は何ですか。その根拠を述べた部分を、——⑤より後ろの本文中から二十五字以上三十字以内で求め、最初と最後の八字をぬき出しなさい。

## 問八

——⑥「なぜ昔話の世界では、子どものない老夫婦が、しばしば登場するのか」とありますが、昔話に「子どものない老夫婦」が登場する理由を、本文全体をふまえて五十字以上六十字以内で説明しなさい。

## 問九

この文章は「昔話」をテーマにしていますが、「昔話」に関する筆者の考えとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 昔話は、子どもにとって楽しい読み物であるばかりでなく、大人にとっても役に立つ智慧の宝庫である。

イ 昔話は、現代人が忘れかけている人と人とのつながりの大切さを思い出させる手がかりを与えてくれる。

ウ 昔話に登場する主人公の行動には共通する一つの型があり、それは現代の私たちにとっても手本となりうる。

エ 昔話からは、それを語り継いできたかつての人びとが何を幸せと考えていたのかをうかがい知ることができる。

## 二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

草野冬彦は私が六歳のときからの幼馴染みだ。ガサツで、乱暴者でガキ大将だったフユちゃん。小学生のころ、私にとって、フユちゃんは学年で一番怖い男の子だった。でも、どうしてだか、こうやって今になって遠い小学校での日々を思い出すと、私の横にはいつもフユちゃんがいたように思う。お互いの家が近かったからか、一緒だった思い出も多い。フユちゃんは個性が強かったから、一層記憶の中で他の子供たちよりも色濃く存在しているのかもしれない。

校庭でよくやったゲーム、ジャングルごっこを思い出す。

(中略)

逃げようと走り回っているうちに、運動音痴の私はよく転んだ。

そんな時、かならずフユちゃんは私を見つけて、自分も走るのをやめて、

「バカだなあ、ほら」

といって手を差し出した。やさしいのか、と思いきや、次の瞬間には泥のついた顔をほころばせて、

「ヤツタ。これでショウシンショウメイ、お前はオレの子分ね」

勝ち誇ったようにそう言うのだった。

(中略)

走り回るのに疲れて、転んだままの私を見下ろして、よくフユちゃんは言った——私の膝に滲んだ血をちらつと横目にしながら。

「なんだあ、痛いんだろ、もうやめて帰る？　しょうがねえなあ。じゃあ、オレ様も帰ってやるよ」

I

本当はそういいたくても、私が口にするのはたいい別の言葉だった。

「……うん」

自分の言葉が、フユちゃんに従わないことが怖いから出てくるのか、本当のところ、私にはよくわからなかった。あのころは歯向かうのが怖くて、言うことを聞いていたようにも思う。二人とも一人っ子だったからいつの間にかお互いを兄妹のように見ていたのかもしれない。

でも、よくよく思い出してみると、兄妹のようにしていた私たちは二人だけではなかった。一人っ子と一人っ子の私たち二人組と、もう一匹、いた。

いつもぼろぼろな薄茶色の毛をして、右耳がどうやっても垂れたままだった、バッジだ。フユちゃんの家には、バッジと呼ばれてい



た雑種犬ざっしゅけんがいた。

小学校一年生の一月、学校からの帰り道のこと。私はフユちゃんとき空地の横の道端みちばたで段ボールに入った「汚きたない薄茶色の毛のかたまり」だった子犬を拾った。子犬はきゅいんきゅいん、と犬だか猫だかわからないような声で泣いていた。それは力なく、まるで世の中がいやになって途方とほうに暮れたような嘆き方なげだった。

子犬を見つけたときのフユちゃんの表情を今でもよく覚えている。あまりに嬉うれしそうな目つきをしていたからすぐに思った。「あ、この子犬はフユちゃんのものだな」と。私も犬が大好きだったけど、なぜか、会ったその瞬間から、子犬はフユちゃんのところへいくべき運命だとそう直感していたのだった。

「茶色い毛はバサバサでほろほろだし、ぱつち、ヤツだけど、なんだかこいつ可愛かわいいなあ」

そう言つてフユちゃんは、子犬をバツジと名づけた。

(中略)

フユちゃんは生まれたばかりのころに父親を亡くした。

女手一つでフユちゃんを育てたおばちやまも——私はフユちゃんのお母さんを「おばちやま」と小さい頃ころから呼んでいる——フユちゃんも、ものすごいテレビ屋で、すぐにテレビ隠かくしで派手はでな喧嘩けんか口調くちようになることが多かった。

おばちやまは近所の音楽教室でピアノを教えていた。休みの日に遊びに行くと、頭にピンクのカーラー\*をつけていることがよくあつて、一緒にいるとおばちやまは細い身体からだなのによく大きな声で笑った。でも私が知っていた他ほかのお母さんたちのようにウソ笑いはしない人で、ましてや大人のような喋り方だたもしなかった……というより、お世辞せじや世間話をしなかったというだけかもしれない。とにかく、小さかった私に対しても、きちんと大人扱おとなごかいをしてくれて、同等に喋なつてくれる人だった。

フユちゃんとおばちやまは親子というより仲のいい姉弟あなづこみたいで、小さな私は、派手に喧嘩する親子を前にして、よく一人であわてた。おろおろとしている私に突然とつぜん気がついて、フユちゃんとおばちやまは言い合いを一旦いったん中断すると、二人して突然目を合わせたまま噴ふき出しながら大笑おほいした。ちよつと見では、仲がいいんだか、悪いんだかわからないような親子——そんな二人がかもし出す、ガサツなように暖かい空気が私は大好きだった。そこにいるだけで、なんとなく暖かくなる気がした。

(中略)

中学を卒業する年の、かすかに冬の終わりを予感させる夜。フユちゃんから突然、電話をもらった。電話をもらったのも、話をしたのもずいぶんとひさしぶりだった。電話口で普通に会話しようとする自分が少し緊張きんちょうしているな、と思ったのを覚えている。電話の向こうのフユちゃんは「ひさしぶり」とも「げんき?」とも言わず、ひどくぶつきらばうな声だった。

「もしもし……あ、俺おれ。悪いけど、家に来てくれない。これから葬式そうしきをやるから」

一瞬、意味がわからなかった。私に対して、怒っているかのようなフユちゃんの声。

「え」と固まってしまった私なんかお構いなしに、フユちゃんは電話した理由をたんたと話し始めた。午後、誤って外に出してしまったバツジーが車に轢かれたこと。おばちゃんまがかなり滅入っていること。そんなことを一方的に話してフユちゃんは、じゃあ待っているからな、と電話を切った。

ジャンパーを羽織って、あわてて自転車をこいで草野家まで夜道を急いだ。

家へついてインターホンを鳴らす。まだ寒かったので上がった息が白く空気を掠りながら消えた。小学校のころから変わらない懐かしい家の前に立っていた。薄茶色のタイルに茶色い扉——玄関横の四角いランタンのような黄色い明かりのまわりを、小さな虫が数匹、まわりつくように飛んでいる。その様子を見たら、小学校からの帰りによくここへ遊びに寄った私を、父が迎えに来た数々の夕方を即座に思い出した。玄関先で父と手を繋いで、おばちゃんまとフユちゃんにさようならの挨拶をして顔をあげると決まってランタンのまわりに虫がたくさん飛び交っているのが見えた。あまりにくつきりと思い出したせいで、気をつけないとすぐにあのころに戻ってしまう感じがした。二回ベルを鳴らしてしばらくすると、中からおばちゃんまがバタバタとスリッパの音をさせながら出てきた。

玄関を開けて、ひさしぶりに顔をあわせた途端、おばちゃんまは涙ぐんだ。

「まあ、レナちゃん、来てくれたの。フユが電話したの？ 本当にかわいそうで、かわいそうで、私のせいなのよ。門をちゃんと閉めたはずだったのに」

「……よお」

バツの悪そうな顔をして暗い廊下の奥から、よれよれのグレーのスウェットパンツ姿でフユちゃんが顔を出した。

ピアノのある、散らかっているけど居心地のいい小さな居間に通される。

窓際で、ピンクの花柄のタオルの上に横たわったバツジーに外傷はなかった。ちよつと見ただけなら、きつとただぐったり疲れて寝ているだけだろう、とも思える。でも、よく見れば、その横顔は魂だけがすぽと抜けてしまっているのがすぐにわかった。もとはにもどらぬ決定的なできごとが起きたのだ。

いつもいたバツジーはもうそこにはいなかった。

ひざまずいて、その亡骸を覗き込んだ。私は何も言えずにバツジーを見ていた。しばらく見ていると、何も変わらなかった。バツジーはやっぱりそこにはいない。目の前にはバツジーによく似た、抜け殻のようなものが横たわっているだけだ。身体③の奥のほうで何かがある、と落ちたような気がした。

私の膝に、ぼたぼたと重たい涙が落ちては跳ねた。涙は跳ねたと思うと、瞬時に私のジーパンに吸い込まれて、膝のあたりに黒いシミがいくつかできるのが見えた。堰を切ったように出た涙が止まらなくなった。意識して止めようとすると、余計に私の肩がしゃくりあげるように上下しはじめそうで、それが怖かった。

「……レナちゃん、ありがとね」

おばちゃんもそつと横から肩を抱いた。

④ きつとフユちゃんが背後で困っているに違いない、と遠くで思った。実際、フユちゃん特有の困ったときの、怒ったような顔をしているに違いなかった。

三人で肌寒い夜空の下、庭の片隅にある、年とった松の木の下を掘ってバッジーのお墓を作った。フユちゃんが汗をいっぱいかきながらスコップで土を掘ってゆく。銀色のスコップが地面に刺さるたびに不器用な音が庭に響いた。私たちは墨汁のように暗くて小さな墓穴に、そつとバッジーを横たえる。一人ずつお祈りをするとフユちゃんがどろどろになった両手で周りの土を大切そうに少しづつ、丁寧にかけた。そして、あまり寂しくならないように、とフユちゃんが台所から持ってきたお酒代わりのりんごジュースの瓶をあけて、三人で乾杯した。「バッジーはこれからすぐく気持ちのいい、幸せな場所に行くのだから、笑顔で見送ろうな。な、バッジー、今までありがとな」

静かで、とても心のこもったお葬式だったと思う。

おばちゃんも少し涙ぐんでしまつて、

「お茶でも入れましようね」

そつと照れくさそうに言うつと、ささつと家が上がった。フユちゃんは玄関の扉がおばちゃんまの背後で閉じると、低い小さな声で言った。

「おい。さんきゅ……」

「ううん」

「バッジー見つけたの、お前と一緒だったしさ。なんかお前には来てもらわないと、思ったんだ。それにさ、お袋がすぐ落ち込んだじゃつてさ、お前が来たら、もしかして元氣が出るかなと思つたんだよ」

「そう。電話くれてよかつた。ありがと」

「別にお袋のせいじゃないのにさ。なんかさ、すごい自分を責めちゃつて可哀想なんだよ、あの人。しょうがねえことなのにな。でも、ほんと……。こうやつていきなり、いなくなつちゃうんだな。信じられねえけど」

言葉の終わりが少し頼りなげに響いた。ふと顔を向けると、フユちゃんがトレーナーの袖で目をこすっているのが横目に見えた。たぶん、バッジーのためと、バッジーの死に責任を感じて悲しんでいるおばちゃんのために泣いているのだらうと思つた。

⑥ その瞬間、「ああ」とわけもなく納得した。やつぱりフユちゃんなんだ、と。

いま思うと、それがフユちゃんのことを心からわかつて、心から信用しはじめた瞬間だったと思う。

(注) \*カーラー……髪を巻き付けて、髪にカールをつける道具。

\*ランタン……外灯。ランプ。

問一 —— ①「シウウシンシウメイ」とカタカナで書かれています。このように表記することで、フユちゃんのどのような様子を

表していますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 小さかったフユちゃんが、意味もわからない言葉を、たどたどしい口調で使っている様子。

イ 兄のようなフユちゃんが、幼い「私」にも意味が伝わるように、はっきりと発音している様子。

ウ 幼いフユちゃんが、大人の口ぶりをまねして、得意そうにしゃべっている様子。

エ おどけたフユちゃんが、「私」をからかおうと、外国語のように発音している様子。

問二 —— 

|   |
|---|
| I |
|---|

 に入る「私」の言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 足が痛いから、送っていつて

イ もう自分になんてならないから

ウ ありがとう。フユちゃん優しいね

エ 誰もそんなこと頼んでないもん

問三 —— ②「玄関横の四角いランタンのような黄色い明かりのまわりを、小さな虫が数匹、まとわりつくように飛んでいる」とあり

ますが、この情景は、「私」にどのような気持ちを起こさせましたか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア フユちゃんの家に預けられたまま、夜遅くまで父親に迎えに来てもらえなかった、あの頃の心細い気持ち。

イ 夜遅くまで父親が迎えに来なくても、おばちやまやフユちゃんと無邪気に遊んでいた、あの頃の弾むような気持ち。

ウ フユちゃんやおばちやまと心地よく過ごした後、迎えに来てくれた父親と一緒に帰った、あの頃の満たされた気持ち。

エ フユちゃんの家ですつと過ごしていたかったのに、父親とともに帰らねばならなかった、あの頃のせつない気持ち。

問四 ~~~~~ a 「バツの悪そうな」、~~~~~ b 「堰を切ったように」の本文中での意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号

で答えなさい。

a 「バツの悪そうな」

ア ふてくされたような

イ うしろめたそうな

ウ 気まずそうな

エ 頼りなさそうな

b 「堰を切ったように」

ア おさえていたものが一度にあふれるように

イ 思い出が次から次へとよみがえってくるように

ウ こみあげる感情にわれを忘れてしまうほどに

エ さまざまな思いが混じり合つてとりとめがないように

問五 ——— ③ 「身体の奥のほうで何かがすこん、と落ちたような気がした」とありますが、これは、このときの「私」のどのような様子

子を述べたものですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア イメージでしかなかった「死」というものが、バツジの亡骸を前にリアルに感じられ、その恐ろしさにおののいている様子。

イ バツジという身近な存在を失つてみて、誰もがいつかは必ず「死」を迎えるのだと、心の底から納得している様子。

ウ バツジという、今まで自分をずっと支えてくれていた大切な存在を失つて、心にぽっかり穴が開いてしまったかのような様子。

エ 頭では理解しているつもりでいた「死」を改めて実感として受け止め、その事実の重さに身体の力が抜けていくような様子。

問六 ——— ④「きつとフユちゃんが背後で困っているに違いない、と遠くで思った」について次の問いに答えなさい。

(1) このとき「私」は、フユちゃんの気持ちをどのように想像していたのですか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア フユちゃんはきつと、自分が葬式に「私」を呼んだせいで、「私」に悲しい思いをさせたと後悔しているのだろう。  
イ フユちゃんはきつと、自分が予期していたのとは違う反応を「私」が見せたので、心の整理ができずにいるのだろう。  
ウ フユちゃんはきつと、「私」があまりに大げさに泣くので、改めてバツジの死を実感して胸を痛めているだろう。  
エ フユちゃんはきつと、悲しみにくれる「私」を前にして、どう接したらよいのかわからなくて戸惑っているだろう。

(2) 「遠くで思った」という表現からは、どのようなことが読み取れますか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」が、バツジの亡骸を前に涙を流しながらも、心のどこかでフユちゃんのことを気にかけていたこと。  
イ 「私」の中にバツジの死を受け入れられないもう一人の自分がいて、「私」が正常な意識を失っていたこと。  
ウ おばちゃんに肩を抱かれて冷静さを取り戻した「私」が、背後にいるフユちゃん存在を急に思い出したこと。  
エ バツジの死の衝撃が強すぎて、いま思い返してみても、遠い記憶のかなたの出来事のようにであったこと。

問七 ——— ⑤「私たちは墨汁のように暗くて小さな墓穴に、そっとバツジを横たえる」とありますが、この文中で使われている表現技法を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬人法                      イ 比喩法                      ウ 倒置法                      エ 対句法

問八 ——— ⑥「その瞬間、『ああ』とわけもなく納得した。やつぱりフユちゃんなんだ、と」とありますが、「私」は、どのようなことを「納得した」のですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問九 この物語の描かれ方の特徴として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 乱暴者だった怖いフウちゃんが優しい少年へと成長していく様子が、過去の場面から順に描かれている。  
イ バッジーとの出会いから始まった楽しい日々が、バッジーの死によつて一転していく様子がドラマティックに描かれている。  
ウ 「私」がフウちゃんを少しずつ理解し信頼していく様子が、過去を回想する「私」の視点から描かれている。  
エ フウちゃんとともに過ごした「私」の思い出が、様々な登場人物の視点を通じて多面的に描かれている。

三 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① ドウソウ会を開く。
- ② フンマツの薬を飲む。
- ③ ロクガした番組を見る。
- ④ 発明品のトッキョを取る。
- ⑤ せっかくの努力がトロウに終わる。
- ⑥ 危険を事前にサツチする。
- ⑦ 五万分の一のシユクシヤク図。
- ⑧ この役はニが重い。
- ⑨ 小児科を受診する。
- ⑩ 田舎の風景。
- ⑪ 実験を試みる。
- ⑫ 本望をとげる。

